



げい、コニカミノルタ(株)、シャープマーケティングジャパン(株)、スズキ教育ソフト(株)、ソニービズネットワークス(株)、Dynabook(株)、テクノホライズン(株)エルモカンパニー、東京書籍(株)、(株)バッファロー、CFD販売(株)、(株)バイオス、理想科学工業(株)の15企業からオンラインで、多くの有用な情報を提供いただいた。

## 2 実践発表・取組紹介

仙台市GIGAスクール推進校 実践発表では、仙台市立館小学校、仙台市立錦ヶ丘小学校、仙台市立台原中学校、仙台市立東仙台中学校、仙台市立仙台高等学校からの発表に続き、その取組について、東北学院大学 稲垣忠教授により講評とともに、講演が行われた(写真2)。

館小学校からは体育・健康教育をテーマとした取組が紹介された。体育におけるカメラの活用、Jamboardによる話し合い、動画教材の活用や振り返りがあった。

錦ヶ丘小学校からは、教師が知識を教授するというものではない、子供自身が学びとる授業へ転換させるための取組が紹介された。それには、対話のための情報活用能力の育成、思考ツールの活用や共同編集、自発的なICT活用へのステップ、ループリックの設定などがあった。

台原中学校の取組としては、デジタル教科書やデジタル教材の具体的な活用が紹介された。また、家庭学習と授業の連携にかかる方策についても実践例が紹介された。

東仙台中学校からは、個別の探究をスプレッドシートで共有する取組や、テキストマイニングによるデータの活用が取り上げられ、個別最適な学びへとつながる事例が紹介された。

仙台高校からは、総合的な探究の時間におけるICTの活用、学びの蓄積や活用の事例が紹介された。これらにより、学校種によって取り組めることの違いを把握することができるものであった。

いずれの取組についても、ICTの日常化や文房具化というのがキーワードとなっており、やってみることから入り、学校での学習上の課題を明確にし、それを教員で共有することがポイントと



写真2・稲垣教授の講演

なっていた。

稲垣教授からは、上記の仙台市における取組を整理した上で、これらの個別最適な学びや協働的な学び、探究的な学びに関する取組をどのように組み合わせるのかについて、今後は重要であることが指摘された。また、中学校の例にあるように、学びの場が家庭に広がっていくこと、これをどう考えていくかについて、いくつかのヒントが提示された。加えて、仙台市におけるGIGAスクールの進展について総括された。同市の取組は、[https://www.sendai-c.ed.jp/~miyagino/giga\\_houkousei.pdf](https://www.sendai-c.ed.jp/~miyagino/giga_houkousei.pdf)に整理されているが、令和4年度は、STEP2にあたる段階で、児童生徒がICTを「当たり前・日常的」に活用するところであるということであった。しかしながら現状を見ると、STEP1の「児童生徒がICT活用になれる」という段階にとどまっている学校もあることから、今回の推進校の学習活動の展開をヒントにして、それぞれの学校での取組を進めつつ、STEP3の児童生徒が自身の学びを広げる段階へと進めてほしいという総括があった。

オンデマンドによる実践報告として、全国のGIGAスクール実践校の取組が紹介された。

以下、5事例の紹介があった。

### ① 『コグトレオンライン』活用で学びの土台を育てる』

田中学園立命館慶祥小学校 長谷川昭教頭

コグトレは、覚える・数える・写す・想像するといった認知的機能を活性化させるためのアプリケーションである。毎朝10分間ある「Root Time」のうち、5分間を活用して実践しており、年間計画も作成している。これにより、個別の学びの充

実や、学習履歴の活用へとつながられる可能性が高まるといえる（図2）。

図2・実践を通じた児童の様子及び今後の展開

**実践を通じた児童の様子及び今後の展開**

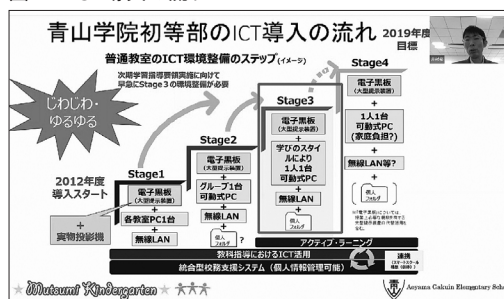
**(教員の声)**

- ・各教科学習で役立つ基礎的な力が伸びているように感じる
- ・教科外の時間に、短時間で認知機能を鍛えることができる点が良い
- ・「さがし算」による活動で、計算力が高まり処理が早くなってきた
- ・1日が朝の集中した活動から始まるという習慣がついてきた

**(今後)**

- ・オンラインプログラムの多様化に期待
- ・認知力測定をして、経年変化を計測して今後の指導に活かしていく

図4・ICT導入の流れ



④ 「『心を育てるプログラミング』に関する教材開発」

京都教育大学附属京都小中学校

野ヶ山康弘教務主任

ICTの活用としては、高学年の段階ではGoogle Workspaceを、より低学年ではロイロノート・スクールを活用している。学校としては、文部科学省研究開発学校として、小学校技術科の研究を行っている（図5）。ものづくりの良さに触れるところで気づくところから、ものの仕組みを探るといった論理的思考力の育成へとつながっている。これらは、これからの時代に必要な資質・能力の育成と関係している。

図5・3年技術科の実践

**3年生技術科の実践**  
「ロボホンと一緒に体そうしよう」

プログラミングの考え方「くりかえし」を使い、同じ動きを複数回繰り返す、楽しい体操を考えてプログラミングし、ロボホンと一緒に体操をする。

⑤ 「『格差』を解消し、学校全体で推進する教育DXの取組」

鹿児島市立星峯西小学校 谷口源太郎校長

なぜICT活用に関する格差が生じるかを考えてみると、これはやり方の問題で、それはリーダーの意識にかかっている。新型コロナへの対応からはじまった学校の取組を研究へと発展させることができた。校長として、教員や保護者へきちんと説明をすることが必要である。研究をどう進めるか、人材をどう育成するかというひとつの好事例（図6）であった。

② 「GIGA環境が広げる小学生の学び」

千葉県柏市立土小学校 梅津健志校長

GIGAスクールに伴って、環境、体制、教育課程という3つの「新」が生まれた。その中で、とにかくやってみるということ念頭に、Google Classroom及び各種サービスの多様な活用が行われた。オンライン化により、当初はあまり考えていなかったが、子供の様子がよく見えるようになった（図3）。各学年にわたる小学校の多様な取組が紹介され、ひとくくりで紹介されることの多い小学校の取組に対して、より実践的なモデルが紹介されたと言える。

図3・とにかく使ってみる一学習状況

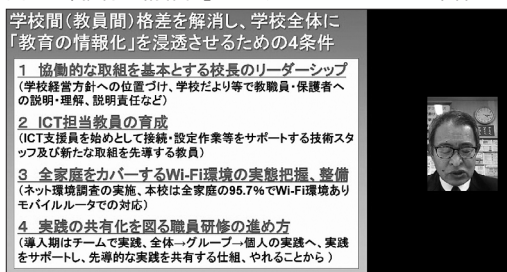
**とにかく使ってみる**  
キーボードリテラシーは休み時間や家でできる  
キーボード島（練習アプリ）の進級状態を確認しな

③ 「日常的な活用 ～真の文房具化を目指して～」

青山学院初等部 井村裕教諭

ICTを使うか使わないかは、子供たちが選ぶということを目指している。そのためには、教員自身はICTを使えないといけない。一足飛びに環境整備をしてきたというよりも、「じわじわゆるゆる」環境整備を行ってきた（図4）。実際に始まった際の動きは速かった。学年や子供自身により、デジタル・アナログを選択しているところへつながっている。

図6・「教育の情報化」を浸透させるための4条件



### 3 パネルディスカッション

締めくくりのパネルディスカッションでは、「GIGAスクールで実現する学び」と題して、文部科学省初等中等教育局GIGA StuDX推進チーム大城智紀氏、仙台市立錦ヶ丘小学校 菅原弘一校長、千葉県印西市立原山小学校 松本博幸校長、姫路市立豊富小中学校 山下雅道校長らにより、議論がなされた(写真3)。このディスカッションにおいては、3名の学校長より、GIGAスクール構想を受けてどのように取組を進めつつあるのが紹介された。また、その流れの中で、自身の経験をもとにして一般教員、ミドルリーダー、管理職に向けてメッセージを発していただいた。

菅原校長からは、ICT活用について一般教員はとにかくやってみること、ミドル層は学内の取組の充実のために自身で外部から情報を収集することや自らも情報を発信すること、管理職はそれらを最小限のブレーキで支援することなどの提案があった。

松本校長は、管理職の視点として教育の理念から学校経営上の戦略を明確にし、新しい価値を生み出していく中で、一般教員には少しずつ自由な発想で進めること、そしてミドル層はその中間的な役割の中で組織的な意思決定を促進するような役割を期待していることを述べた。

山下校長は、学校で行われている教員の自由な発想に基づく取組を紹介しながら、今まで慣習として取り組まれてきたものを見直すこと、例えば「授業や板書とはこうあるべき」というところの「べき」について改めて見直す時期に来ているのではないかという主張があった。

これらを受けて大城氏からは、GIGAスクール



写真3・上段左から筆者・大城氏・山下氏  
下段左から菅原氏・松本氏

構想下で積極的に進められている好事例であることを認めながら、さらに多くの学校が進めていくにあたり、どのような情報源を活用すればよいか、文部科学省のWebサイトなどの現在の新しい情報を参考としながら紹介していただいた。

登壇された3名の学校長とも主張の内容はある程度一致しており、GIGAスクールのような革新的な取組というものについて、上意下達のように進めるというよりも、教員と一緒にボトムアップ型でやってみることで、より意欲的に各教員が進めることができること、校長も他の教員も時代に敏感になるということが、そのメッセージより感じられた。また、ICTをただ活用するだけではなく、情報活用能力の育成を核となる考え方として取り入れていくことの重要性が確認された。

### 4 今後の展開・展望

本大会において、「とにかくやってみる」というのがひとつのキーワードとなっていた。これは、GIGAスクール構想の中で出版された多くの書籍の中でもかなり触れられている。しかし、私が大会を通してこれらの方々の発言から気がついたのは、「とにかくやってみる」いないということである。自身の発想や経験に基づき、工夫・改善しているのではないかと考えた。「とにかくやってみる」というフレーズのみが切り出され、伝えられたら、あとに続くものが負担を感じてしまうのではないだろうか。こうした大会を通して、誰が、どういう目的で何を、どういう手続でやっているのか、こういうことをさらに明確にしながら、先進的な事例に学び続けることの必要性を指導講師として指摘し、閉会した。

※本稿中の所属は、大会当日のもの。